

第 88 回麻布獣医学会 一般演題 12

GDV に対する消化管内視鏡を用いた低侵襲的捻転整復 および PEG チューブを応用した胃腹壁固定法の検討

宮本 修治, 山口 恭寛, 永滝 春菜, 栗原 幹直, 杉浦 洋明

DVMs どうぶつ医療センター横浜 救急診療センター

I. はじめに

胃拡張胃捻転症候群 (GDV) は大型犬に好発し、小型犬ではダックスフントにも多くみられる疾患である。治療は通常、胃の減圧および外科的捻転整復・胃固定術が行われるが、今回、開腹手術を行わずに、消化管内視鏡を用いて低侵襲的に胃の減圧および捻転整復を試みた症例で、その後の再発時に内視鏡下での胃の減圧・捻転整復実施に加えて、胃腹壁固定を目的とした PEG チューブ設置を行い、良好な経過が得られたのでその概要を報告する。

II. 症 例

症例はミニチュアダックスフント、11 歳、避妊雌、体重 3.95 k g, 空嘔吐と上腹部膨満を主訴に来院した。初診時 (第 1 病日) のレントゲン検査にて GDV を疑う像を確認した。胃の減圧を目的に、まず無麻酔下にて経口的胃チューブ挿入を試みるも胃までの挿入が叶わず、経皮的胃穿刺にて減圧を実施した。

しかし、粘稠度の高い胃内容物のため十分な減圧がなされず、外科的な減圧・捻転整復の必要性を勧告するも、飼い主はできる限り手術は避けたいとの希望で

あったため、全身麻酔下にてまず内視鏡での胃の減圧を試みる事とした。その結果、胃の減圧及び捻転の整復に成功した。

しかし、第 157 病日に GDV を再発し来院した。再び経口的胃チューブ挿入および経皮的胃穿刺にて減圧を試みるも十分な減圧が得られず、第 1 病日と同様に内視鏡下にて胃の減圧・捻転整復を実施した。

また、再発例であったため、同時に再拡張へ対応する目的および胃腹壁癒着固定を目的として胃体部に PEG チューブを設置した。

その後良好な経過をたどり、第 190 病日 PEG チューブを抜去し、以降第 620 病日にあたる現在まで GDV の再発なく、良好な経過が得られている。

III. 考 察

GDV に対する低侵襲的治療法の選択肢として、消化管内視鏡による胃減圧・胃捻転整復および PEG チューブ設置による胃腹壁癒着固定法は有用である可能性が考えられた。今後もデータを積み重ねていくことで、その適応について検討していきたい。